追　悼

島津幸子さんのこと

東京大学大学院総合文化研究科教授　小野　秀樹

島津幸子さんに最初にお目にかかったのは何時のことであったのか、明確に思い出すことができない。思い返すに、島津さんはお茶大の大学院におられた頃かご卒業の直後から、本郷の木村英樹先生のゼミに出席し、その繋がりで木村ゼミ関係の研究会などにも参加され、そういった折にだんだんとわたしも顔馴染みになり話をするようになったような気がする。恩師の木村先生の還暦記念論集を刊行する計画が固まった頃から、門弟を中心としたメンバーによる研究会が定期的に、かつ頻繁に開かれるようになった。島津さんもほぼ毎回参加され、半ば一門の身内のような存在になっておられた。そういった段階を経ていく途中の2010年春に、島津さんは立命館大学法学部に赴任された。その2年前に、わたしのもう一人の恩師である中川正之先生が神戸大学を辞して立命館大学に移っておられた。島津さんは東京で木村先生の薫陶を受け、のちに京都で中川先生のご同僚になられた。わたしの恩師とご縁が深いお方であった。

島津さんは、真面目で、律儀で、仕事の上では驚くほどに几帳面であったがそのことで他人に圧力を与えるようなことは無く、そして、稀にではあったがお茶目な人であった。万事控えめで、人を押し退けて前に出るというようなことは決してなさらなかったが、言うべきことはきちんと仰った。物静かでいつも穏やかな口調で話されるが、話される内容は

簡にして要を得ており、さらりとした語り方であった。真面目ではあっても堅物ではなく、むしろ相手のことを気遣って常に周りと和しておられた。こちらが少々灰汁の強い冗談を言っても、クスクスと可笑しそうに笑ってくださる人であった。不良中年で無遠慮なわたしは、不躾にもあるとき島津さんに、「年中ずっと中国語の研究ばかりしていないで、たまには全く関係の無いことをするとか、中国以外の国にも遊びに行かれたらどうですか？」というようなことを言ったことがある。そのとき、島津さんは即座に、ご親友がドイツにおられることを話され、近いうちにぜひ行ってみたいと答えられた。そのご返答を受けて、わたしは「自分は欧州には数度行ったことがあるが、ドイツには一度も行ったことが無いので、それなら本当に近いうちにドイツに行って、土産話を聞かせてください。お城が美しいそうなので、たくさん写真を撮ってきてくださいよ」とお願いしたのだが、それは叶わぬことになってしまった。

島津さんは2014年秋から日本中国語学会の会誌編集委員に就任された。そのときわたしも同じく編集委員を務めていた。島津さんのお仕事ぶりは、まさにその律儀さが随所に顕れ、あまりの丁寧さに同席しているほかの委員が瞠目する場面すらあった。編集委員は2年の任期を2期連続、計4年務めるのが慣例であるが、島津さんが委員になられて1年後の秋に、あらたに学会会長に就任することが決まった京都大学の木津祐子さんがわたしに電話をかけて来られた。要件は、現在編集委員である島津さんを、できることなら来年春から学会事務局幹事として迎えたいのだが、兼任するのは難しいだろうし、どうしたらよかろうという相談であった。この話は結果として島津さんの幹事への転任ということに落ち着いた。学会の運営をしていく上で、どうしても島津さんの力を借りたいと木津さんが考えられたのも、偏に上で述べた島津さんのお仕事ぶりとご人格をお認めになられていたからであろう。

2016年3月下旬、中川先生が立命館を定年退職されるに当たり、お祝

いと慰労を兼ね、先生の奥様もお誘いして京都で一日遊んだ。わたし一人では愛想が無いので、島津さんにも声をかけて参加をお願いすると二つ返事で来てくださることになった。当日を迎えるまで、散策のコースや食事をするお店などについて、島津さんに色々と相談させていただいた。島津さんはご面倒を厭わず、中川先生にも何度もご意向などを訊いてくださり、また、わたしの計画案にも丁寧に耳を傾けてくださって、綿密に打ち合わせをすることができた。当日は春とはいえ、まだ肌寒い気候であったが、嵐電に乗り大河内山荘や常寂光寺を散策して早めの山桜や竹林を見て回り、夜は木屋町でおばんざいを食べた。中川先生ご夫妻がお帰りになったあと、首尾よくお祝いの会ができた打ち上げ代わりにもう少しだけ飲もうということになったが、そのとき島津さんが「木津さんも呼びましょうか」と提案された。一週間後から木津会長の学会事務局がスタートするに当たって、直前に懇親を深めておこうと思われたのかもしれない。わりと遅めの時間であったが酔いに任せて電話をかけると、折良く木津さんも知人との食事を終えて帰宅されるところであった。待ち合わせて三条辺りのバーで３人一緒に飲んだ。普段はこの３人だけで飲むような機会は訪れないので、珍しくもあり、また非常に楽しい時間であった。

木津会長体制における１年目の学会全国大会は、晩秋の別府で開催された。学会で来ているので仕方が無いのだが、せっかく有名な温泉地に来ているのに、わたしは大会二日目の日曜日の早朝に公営浴場に慌ただしく入りに行くくらいしかできなかった。そのあとも個人的な予定があって、早めに別府を発つことになっていた。島津さんにそのことを話すと、「わたしは逆に、日曜の夜ももう一泊して、ゆっくり全国大会お疲れさんの会をやるんです」と嬉しそうに仰った。学会事務局を預かっておられる方々からすれば、全国大会を無事に終えた瞬間は、やはり安堵とともに緊張感から解き放たれるのであろう。「日曜の夜は、ゆっくり温泉に入っ

て、美味しいお酒が飲めます」と、島津さんは何とも言えずお茶目な表情をされた。

その翌月、定例の研究会が開かれた。この研究会はずっと土曜日の午後に行なってきたが、次回は初めての試みとして、春に合宿形式で琵琶湖に行こうということになった。追って具体的な計画を立てる際に、合宿最終日、すべてのプログラムを終えたあと、希望者だけで本諸子（ホンモロコ）と鴨鍋を食べに行くことにした。島津さんも参加を希望され、楽しみにしておられた。雑誌で本諸子の写真を見たと言って、きれいな魚ですねとメールに書いて送って来られた。

琵琶湖からの帰りは、急ぐ旅でもなし、ゆっくり新幹線のこだま号で帰ろうと思い立ち、同じく帰京する若い人たちに声をかけた。念のため島津さんにも伺ってみると、琵琶湖からは京都ではなく東京に戻られるということで、ご一緒することになった。チケットを購入し、2月28日に島津さんから「こだま号のチケットのご予約、どうもありがとうございました」というメールを受け取った。その2週間後にご訃報に接した。島津さんは、何の前触れも無く、また、おそらくご本人も何の心の準備も無く、わたしたちの前からいなくなってしまわれた。琵琶湖合宿の開催の日、最初に参加者全員で島津さんに黙祷を捧げた。

冒頭で述べたように、島津さんとのお付き合いが何時から始まったのかは分明ではないが、およそ10年くらいの時間ではなかったかと思う。仕事の面でも、また恩師を交えた交流においても、島津さんには色々とお世話になった。これまでに賜ったご厚情に対し、心から厚く御礼申し上げたい。